

2025 年 10 月 12 日 神学校日（聖霊降臨節 第 19 主日）礼拝

メッセージ「本当の正しさ」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 20 章 1-16 節

4 月 13 日の日曜日から始まった「大阪・関西万博」が、いよいよ明日で半年間の開催期間の最終日を迎えるそうです。開幕当初の様々な批判を乗り越えて、今では連日、入場も出来ないくらいの超満員で、開催期間中の来場者数も 2800 万人を超えたそうで、運営費の黒字ラインを越えたとも報道されています。私の身近なところでも、この半年間に 10 回以上万博に行ったという人もいたり、162 ある全ての海外パビリオンに行ったという人もいたりしました。そのような方々のように「通期パスポート」を使って何度も通われた人も多かったようですし、学校の遠足や修学旅行で行った学生たちも多かったことを考えると、実際の売り上げや経済効果というのは、当初語られていた「大阪や関西圏の経済の起爆剤」には、ちっともならなかったのではないかと思います。そもそも赤字か黒字かの話も、開催期間中の運営費を賄えるかどうかというだけの話です。閉幕後には全てを取り壊す半年間だけのパビリオン建築費や会場となった夢洲のインフラ整備には、莫大な税金が投入されており、もちろんそれらには到底及びません。全てはこの後に来るカジノや IR（総合型リゾート）のための前座、露払いだというわけです。

明日には、盛況の内に閉幕を迎えるということを、万博協会の運営側は望んでいるのですが、その裏側では、海外パビリオンの建設費の不払い問題が多数発生しており、訴訟も起こされています。「日本の国家プロジェクトのために、中小企業の皆さん、どうか力を貸してください、お願いします」と大阪府知事に懇願されて、一念発起して大変な工事をやりとげたら、海外の元受け企業が雲隠れして工賃が支払われず、府知事も万博協会も「騙された方が悪い」とでも言わんばかりの知らんぷり。悪徳企業によって日本の企業がただ搾取されて泣き寝入り、というとんでもない状況になっています。「この万博は成功だった」と言っている足元や裏側には一体、何があるのか。「いのち輝く未来社会のデザイン」という万博のメインテーマとは裏腹に、多くの人々の命や生活、また会場となっている夢洲にいた希少生物たちの命が踏みつけられたことなどが、権力を持つ人たちによって意図的に隠され、見えにくくされている現実には、私たちの社会は今、目を向けなくて、本当に大丈夫なのでしょうか。

聖書が私たちに告げている「本当の正しさ」や、「社会正義」「共に生きる」とは、一体どのようなことなのでしょう。そのことについて、聖書の言葉に聞いてみた

いと思います。今回のお話は、「ぶどう園の労働者のたとえ」という小見出しが付
けられているお話でした。季節はぶどうの収穫の時期です。1 週間ほどの限られ
た時間の中で、収穫を済ませなければならず、猫の手も借りたいくらいに忙しいと
いうわけで、日雇いで大勢の労働者を雇って、とにかくぶどうを収穫してしまう必
要がありました。農作業の機械化が進んだ現代でも、収穫期には家族や親族一
同が集まって、大勢で収穫作業をするという光景は珍しくありませんし、私たちの
教会でも、玉ねぎやジャガイモの収穫に、「縁農」で和歌山県の農園にお手伝い
に行かせて頂いているのも、そのような収穫作業の足しに少しでもなればと言う
思いからです。

さて、このお話の主人は、朝早く、夜明けとともに仕事を求める人々が集まる広場
に行き、仕事を探している労働者たちに声をかけ、一日につき 1 デナリオンの契
約をし、ぶどう園に送ります。その後も、9 時、12 時、それから午後 3 時、5 時と何
度も広場に行き、新たに労働者を雇い、ぶどう園に送りました。そして夕方にな
って、その日の作業が終わり、賃金の支払いが始まりました。最後に来た人たちか
ら順番に最初に来て人たちまで、賃金が手渡されていきます。夕方 5 時ごろに来
た人たちは、わずか 1 時間ほどしか働いていないのに、1 デナリオン受け取って
いましたから、夜明けと共に、それこそ 12 時間近くも暑い中、丸一日辛抱して働
いていた人たちは、もっとたくさんもらえと思っていたのにもかかわらず、同じ 1 デ
ナリオンでした。彼らは主人に不平を言いましたが、主人は答えました。「友よ、あ
なたに不当なことはしていない。あなたは私と 1 デナリオンの約束をしたではない
か。自分の分を受け取って帰りなさい」(13-14)……。

さて、このお話を聞いて、主人と、その主人に不平を言った労働者と、どちらが
「正しい」と思われるでしょうか。私自身、このお話はなかなか納得しにくい、腑に
落ちないお話だと思って来ました。現代の私たちの感覚では、1 時間働いたら「時
給いくら」というのが当たり前ですから、夕方から 1 時間働いて 1 デナリオンなら、
朝から 10 時間働いた人は 10 デナリオンをもらって当然だと思います。しかし、天
の国、神様の価値観ではそうではない。それこそ、この 1 デナリオンが銀貨 1 枚で
はなくて、一人の人の一日の命を養うパン 1 斤、それこそお弁当一つだったらどう
でしょうか。朝から丸一日働いた人にも、夕方から 1 時間しか働かなかった人にも、
神様は等しくその命が養われるように、明日へと命を繋いでいけるようにしてあげ
たいと思っておられる。そのように理解して来ました。

そしてまた、「何もしないで広場に立っていた」のも、わざとサボっていたわけ
はなくて、働きたいという思いはあっても、誰からも雇ってもらえなかったからであ

り、雇ってもらえなかったのは、恐らく年齢が高めだとか、体が丈夫ではないとか、何らかの障がいがあったとか、様々な要因からだったのだろうと考えると、そのような制約条件にかかわらず、「神様の恵みは全ての人に等しく、1デナリオンずつ、約束通りに与えられるのです」という理解は、確かに一理あるようにも思います。ですが、改めて考えてみた時、本当にそうなのでしょうか。

よく「1 デナリオンというのは、当時の労働者の一日分の賃金に相当する」と言われて、聖書の巻末の度量衡にもそのように記されています。ですが、実際には当時の社会の中でどれくらいの貨幣価値だったのかは分からないようです。時代によっても物価は変わりますし、「1 デナリオンが一日分の賃金」というのも、実はこの「ぶどう園の労働者のたとえ」が基になって、恐らくそうだったのだろうと考えられているだけのようです。ですが、ぶどうの収穫の繁忙期ですから、こちらのぶどう園でも、あちらのぶどう園でも、人手が欲しいわけです。そのような繁忙期には、当然日当や時給も高めに設定されますから、どうやらこの 1 デナリオンというのは、一人の人がようやく一日分の命を繋ぐための「お弁当一つ」というわけではどうもなさそうです。そのように考えてみると、この物語はまた違って読むことができるのではないのでしょうか。

私には、13 節以降の「友よ、（私は）あなたに不当なことはしていない。あなたは私と一デナリオンの約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰りなさい。私はこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。自分の物を自分のしたいようにしては、いけないのか。それとも、私の気前のよさを妬むのか」と語る主人の方が、主人に対して不平を言っている労働者よりも、むしろ冷酷で、労働者たちに対して不当な仕打ちをしているように思われてなりません。それこそ、今回の万博のパビリオン建設と、その工事費不払いについて、「資金繰りについて、一時的な貸し付けでもいいから、何とか助けて欲しい」と訴えてくる業者に対して、「私はあなたたちに『パビリオン建設を助けてほしい』とは言ったが、どの元請けと契約をして、その契約がどのように履行されたかは知らない。不払いするような元請けと契約したのはあなた方の問題であり、『友よ、（私は）あなたに不当なことはしていない』」と回答している大阪府知事や万博協会の幹部たちのセリフと同じだと思われてなりません。

そのようなことを考えながら、このお話を改めて眺めてみると、むしろこのお話は正反対のことを私たちに告げているのかもしれない。冒頭 1 節は「天の国は、ある家の主人に似ている」とありますが、以前の新共同訳では「天の国は次のようにたとえられる」でした。ギリシア語の原文では「たとえられる」「似ている」「比べられる」

は全て同じ言葉です。そのため、これまでは「天の国の主人＝神様」という理解で読まれることが多くありましたが、むしろ反対に「天の国の価値観というものは、このようなぶどう園の主人と比べられるものだ。比べてみるとどうだろう」という意味で理解することもできます。15 節の後半「私の気前のよさを妬むのか」という言葉も、如何にも労働者が悪者であるかのような翻訳になっていますが、原文では「私が善良だから、あなたの目が邪悪になっているのか」です。ですから、そのような嫌味を言う主人の方こそが、強権を濫用する厚顔無恥な存在なのではないでしょうか。

イエス様のたとえ話を聞いた人たち、貧しい庶民たちが、「主」や「主人」という言葉を聞いて、すぐに思い浮かべたのは、「主なる神様」「天の神様」ではなくて、むしろ普段の自分の雇い主である「主人」、人間のいわゆる「旦那様」たちであったと思われます。「うちのご主人様はこんなだけれど、あちらのご主人様はあんなだよ」というような会話が、普段から人々の間ではたくさん行われていたでしょう。そのように少しでも良い条件の所で働きたいと願うのは、当然のことでしょうし、そのような中で「こんな主人がいたらどう思う。天の国をこんなぶどう園の主人と比べてみたらどうだろうか。考えてごらん」と、イエス様が人々に問いかけられた。そのように考えてみると、このお話の結論は、朝から晩まで暑い中を一日中働いた人たちと、夕方から一時間だけしか働かなかった人たちが、共に主人の言いなりになっているような不当が許されてはならない。今この社会では、権力を持つ「主人」が、人の上に立って「自分の物を自分のしたいようにして」(15)、私たち庶民をないがしろにしている。しかし、来るべき天の国、神様の価値観に基づく、本当の正しさとは、全ての人が労働を侮られず、自尊心を傷つけられず、存在そのものを尊重されて、生活に必要な糧を得られる世界なのではないでしょうか(山口里子『イエスの譬え話Ⅰ』)。

「本当の正しさ」とは、神の名を語って強権をふるう中にあるものではありません。むしろ自分自身が仕事を与えてもらえずに夕方まで広場で立ち尽くすしかなかった経験を持ったイエス様が、そのような世の中で弱く小さくされた人たちと共に、低みから立ち上がられたように、権力によって踏みつけられて弱く小さくされている人たちの側にこそ、「本当の正しさ」というものは、あるのではないかと思います。政治も社会も混迷し、それぞれがそれぞれの正義を好き勝手に語り、反対者を批判するよう時代の中にあって、私たちは「神が、今、どこに、誰と共におられるか」ということを考え、目と心を向けていきたいと思います。今週もまた私たちは、世の低みから働かれる神様と共にあって、導かれていきます。